有限の時を捧げた人を想う農園

特集 林檎

赤地正志

文：梶原圭三
写真：川上和禎

大きな長方形

山あいにアメフトのグラウンド（らしきもの）が見えた。

昨年の10月、九州りんご村の情報をキャッチした私はグーグルマップでその所在地を調べていた。福岡県嘉麻市馬見。住所を入力するとそのエリアが現れ、難なく九州りんご村が見つかった。位置関係を確認し、当地までの移動ルートなどを調べていたところ、馬見周辺の山あいマップの中から見慣れぬものが視界に入ってきた。「こんな所にアメフトのグラウンド?」。一瞬そう思った私は、画面を拡大してみた。ひときわ広い横長の長方形に一定間隔に引かれた縦線。アメフトファンであればイメージつくであろう。10ヤードラインが規則正しく引かれているかのような長方形が、山あいの集落の中に違和感を放って佇んでいた。

農村の光景をグーグルマップで俯瞰すると、平地の水田地帯は区画整理されていることもあり比較的規則正しい長方形がつながっている事が多い。一方で、山あいでは、斜面を利用している事もあり、畑や水田は不規則な形をしている。特に果樹園はそうだ。その長方形は一見水田のようにも見えたが、10ヤードラインのような縦線がどうも気になっていた。しかし、一時的に違和感を感じたものの、九州りんご村の下調べに追われていた私は、いつしかその長方形の事を忘れていた。そして、その長方形が今回の特集の最大の目玉になる事を、この時は知る由もなかった。

樹齢140年

福岡県嘉麻市馬見。嘉麻市と言えば、2018年に6号で特集した赤崎牛の産地。赤崎牧場がある熊ヶ畑とは、山二つほど隔てた馬見地区。福岡県のほぼ中央に位置し、古処山系の馬見山の麓に広がる集落である。標高978メートルの馬見山から流れ出す冷涼な屏川渓谷のめぐみに支えられ、古くから梨の栽培や棚田による米作りが盛んであった。昼と夜の寒暖差が大きく、温暖化の影響で夏場は暑いものの、秋口に入ると夜は肌寒くなる。この寒暖差が、今でもこの馬見地区の農業を支えていると言っても過言ではない。この地で梨の栽培が始まったのは明治の中頃。その頃から梨の栽培を続けている赤地家の四代目が今回の主人公赤地正志さん（47歳）である。赤地家の梨畑には、その歴史を感じさせる樹齢140年の梨の老木があり、今でも立派に実をつけている。太い幹から四方八方に伸びた枝は成人男性の太ももほどの太さがあり、一部には苔が生すなど、その重厚感には歴史の重みを感じさせる。太い枝から無数の梨の実がぶら下がっている光景は、その梨の老木が今まさに卵を産み落とさんとしているかのようであった。

最盛期

九州りんご村『三翠園』。この農園の正式名称である。今から40年ほど前、正志さんが小学生当時、父親の好人さんと母親の輝子さんがりんごの栽培を始めた。それ以前は梨の栽培と米作りが専門で、昭和44年には地元の果樹農家どうしで『宮小路果樹組合』を設立。農協に依存せず、梨狩り観光農園を中心に運営していた。その後、減反政策の煽りを受け米作りが制限される中、観光農園のノウハウが活かせるりんご栽培に白羽の矢が立った。また、この馬見という地が、長野の気候に似ている事も、りんご栽培を後押しする要因となった。とはいえ、当時は福岡でのりんご栽培は極めて珍しい。近隣に指導者はいない。好人さんと輝子さんは、果樹組合の仲間達と共に長野へ視察に行き、りんご栽培を学んだ。つがる、あかぎ、陽光、王林、ふじといった品種を栽培し、徐々に水田がりんご畑に変わっていった。

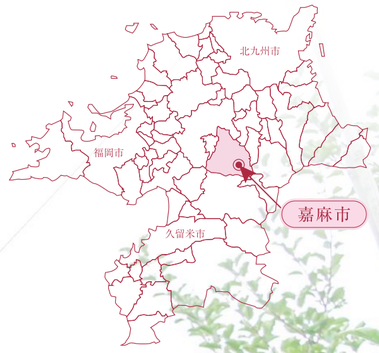
「当時は賑わいました。大渋滞でした」。輝子さんは当時を懐かしんだ。最盛期には14件あった九州りんご村。地元自治体のバックアップもあり、各地から多くの観光客が訪れりんご狩りを楽しんだという。「りんごの花の咲く時期には、花祭りを開催していました。ミスりんごコンテストもあって華やかでした」。福岡でのりんご狩りが珍しいという点だけでなく、味も良い事から、評判が評判を呼んだ。この九州りんご村の活動は、村興し部門で農林水産大臣賞を受賞したという。当時、組合長をしていた好人さんは熊本での授賞式に参加した事を誇らしげに語ってくれた。

就農

1973年、赤地家の次男として生を受けた正志さんは、キャプテン翼に憧れ、子供の頃は学校の運動場でサッカーに明け暮れていた。農業にはほとんど関心が無かったという。学校卒業後も大工としての道を歩み始めた。大工と言えば我々がイメージするのは、いわゆる木造の家を建てる木造大工である。正志さんはまず木造大工の修行を積み、その後、型枠大工の道に進んだ。型枠大工とは、コンクリート建造物を作る際に、生コンクリートを型枠に流し込むが、その型枠を作り、コンクリートが固まるとその型枠を取り外すという一連の流れを担う専門職である。ビルやマンションだけでなく橋やトンネルなどを建造する上で、コンクリート構造物は強靭な躯体を実現する為に極めて重要である。よって型枠大工にも熟練の技能が求められる。物作りが好きな正志さんは、型枠大工の仕事にやりがいを感じていた。

ところが2008年、世界中をリーマンショックが襲う。読者の皆さんも記憶に新しいと思うが、様々な経済活動が停滞し、多くの産業で倒産、失業が相次いだ。特に建築業界は大きな影響を受けた。正志さんが所属する建築会社もその波に抗う事ができず、正志さんの仕事は激減。自宅待機を余儀なくされた。やる事もない正志さんは、ちょうど花摘みや摘果といった人出の必要な時期だった事もあり、暇つぶし程度に実家のりんご園を手伝ってみた。ところがこれがハマったという。「やり出したら面白くて面白くてハマってしまいました!」。その後、正志さんは型枠大工を辞める事を決意、就農するに至った。

自己責任と覚悟

就農1年目は、両親に基本的な作業の段取りを学んだが、2年目からは自ら積極的に学び始めた。果樹組合の剪定教室に参加するだけでなく、書籍やインターネットを通じて新しい技術を貪欲に収得した。長野にも何度も視察に訪れたという。「りんご作りにのめり込みましたね」。元々、物作りが好きだった事もあり正志さんは作る楽しみを感じていた。一方で責任感も増したという。観光農園という特性上、自分が作った物を目の前でお客さんが評価するのである。「品物が悪ければ誰も買わんですもんね。いくら安くしても」。ボソッと呟く正志さんの言葉は真理であり、そこには覚悟が込められていた。

正志さんは、りんご栽培に大切な要素は3つあるという。肥料、剪定、灌水である。肥料は有機肥料のみを使用している。即効性のある化学肥料と異なり、有機肥料は土に馴染みながらゆっくりゆっくり効いてくる。花の咲く5月に効くように冬場の1月頃、全て手作業で撒く。剪定とは、必要な枝を残し、不要な枝を切り落としていく作業である。剪定の目的は、日当たりを良くする、風通しを良くする、花や果実を大きくするなどが挙げられる。一見、素人にもできそうに思えるが、これには熟練の技能が求められる。切り過ぎてもいけないし、切り残してもいけない。どの枝を切るかの判断は、その枝がどのように生長するかの想像力が必要である。10年経験を積んでも、まだまだ奥が深いと正志さんは呟く。灌水とは水を撒く事である。福岡の場合、気候が乾燥し雨が少ない5月はマメに灌水する。りんごの場合、水が不足すると玉が大きくならないという。一方で撒き過ぎてもいけない。正志さんは、この3つの基本的な作業を、りんごの木と対話しながら黙々とこなしてきた。朝早い時は5時半に起き、夜遅くまでりんごと向き合ってきた。「作業、キツくないですか?」という私の質問にも「全く苦になりません」と意に介さない。「自分で時間管理ができますからねぇ」。農業には自然と対峙する難しさがある。最近はその自然の変化が予測困難になってきている。それでも、人に管理されている事に比べるとマシ、という生産者は多い。全てにおいて自己責任。その覚悟さえ持てれば、農業という仕事は実に魅力的だと正志さんは語る。その正志さんに、ある日突然大きな不幸が訪れた。